

古川 知明

(埋蔵文化財センター主幹学芸員)

1 はじめに

平成18年秋、富山市埋蔵文化財センターが実施した富山市南部の大沢野地域における遺跡分布調査で、矢穴の穿たれた大石が発見された。その地点は、神通川が形成した中位河岸段丘上で、現在の神通川からは500m東に離れる(第1図)。矢穴石のある地点は、段丘崖から約10m離れた平坦な畑地である。周囲には旧河床礫とみられる小礫が広く分布する。

矢穴石は、長さ約2mほどの安山岩塊で、脇に割り取られた石の一部が残っている。発見時の写真では矢穴数個が石の中央にみられたが、コケを取って掃除したところ、矢穴以外にも加工痕が多数確認された。

この地点は、「下大久保九番遺跡」として、平成19年3月に遺跡地図に登載された。

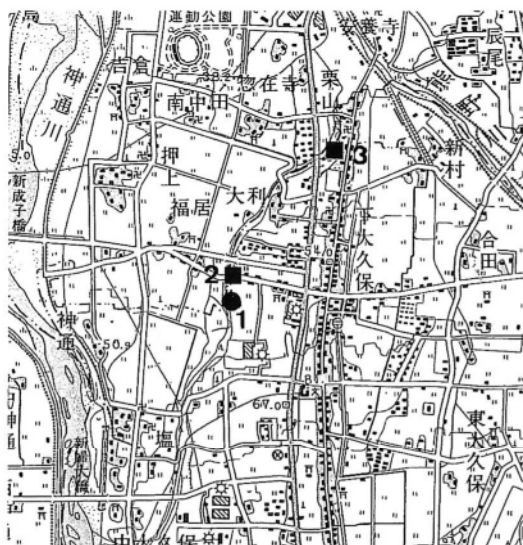
2 矢穴石の概要

①規格 地表面に露出している矢穴石(第2図)は、東西に長く、最大長2.2m、最大幅1.3m、最大高0.75mである。形状からみて地中に埋まっている部分はさらに大きいと推定されたため、ピンボールを地中に刺して確認したところ、東西約2.5m、南北約1.6mの大きさであることを確認した。石の北西隅には、この矢穴石から割り取られたとみられる50×40cmの板状の石が残る(矢穴は未確認)。

②矢穴列 この石には28個の矢穴痕が認められ、A～Lの12の矢穴列が復元される(第3図)。各矢穴列には2個～数個の矢穴が1.5cm(5分)～3cm(1寸)の間隔を置いて並ぶ。

Aは未完成の矢穴で、彫込み初期のもの。石ノミで長方形に縁取って矢穴輪郭を形成した時点で放棄された。Bは、矢穴の彫込みを完了したが未割のもの。弧を描いて7個の矢穴が存在する。Cは図左側のN列の矢場取り目的とみられる。Dは4個の矢穴を穿ち、内2個の間を除去して溝状に連結した後、途中放棄したもの。E・F・Lは長軸方向に直線的な割り取りを行った矢穴底面の痕跡。E-F間は15cm(5寸)、F-L間は9cm(3寸)である。G～Kは長軸直交方向に入れたもので、割り取りあるいは矢場取り目的とみられる。

M～Oの3列の矢穴列は、矢穴と矢穴の間にある部分を取り去り、V字状の溝に整えたもの。「溝切」と呼称する。溝の側面は平滑な平面に整形している。N・Mは長さ1.06m(3尺5寸)でNは直角に折れて溝切が続く。O-N, N-M間は30cm(1尺)及び48cm(1尺6寸)である。EはMと重なり、M列作出に伴う矢穴底面である。E・D列の検証から、溝切は複数の矢穴を連結して作出したものであると理解できる。



第1図 位置図 (1:50,000)

1. 矢穴石 2. 伝福居古墳 3. 伊豆宮古墳

③個別矢穴の形態 残存状況のよいB列の矢穴は、底面が狭くなり、石ノミ先端の痕跡を残す(写真4)。横断面形はV字形、平面形は台形を示す(写真7)。

3 矢穴石にみる石割技術と年代

このようにこの石には、B列のような矢穴列による割取技法Aと、矢穴列を連結して溝切する割取技法の2種類の割取技法Bが混在する。Bは直線的な割り取りにのみ見られ、弧状の割り取りには使用されない。これらは矢穴を深くするための矢場取加工の一種とする見方もできようが、溝底は矢穴底面まで及んでいることから、むしろ溝彫りによって割取ラインを定めやすかったものと理解すべきであろう。

これらにより割り取られた石材は、薄い板状の石材で

ある。石垣石材ではなく、石造物あるいは階段等構造物の材料にされたと推定される。

矢穴による石割技術は鎌倉以来出現する⁽¹⁾が、顕著に認められるようになるのは城郭石垣築造に際して大量の規格石材調達の一必要性が生じた織豊期以降である。北陸における城郭石垣編年は金沢城を中心に確立しており、金沢穴生が携わる石割技術系統における矢穴出現時期は概ね慶長期とみられている⁽²⁾。

本例から復元される矢穴+溝切技法による石割技術は、これまで県内では未確認であったが、新たに氷見市加久麻神社⁽³⁾、慶長期富山城石垣⁽⁴⁾に存在することを確認した。いずれも安山岩であるという点が共通する。しかし慶長期富山城石垣石材にみられる矢穴と比較すると、規格は近似するが、富山城では底面部分が一定の広さを確保しており(写真8)、加久麻神社も同様である。また中世期には矢穴平面が方形基調のものが多くとされ⁽⁵⁾、本例とは異なる。一方近代に



第2図 矢穴石実列図 (1:20)

おける矢穴は規格がほぼ半分になり、大型矢穴は消失する。

以上の検討から現段階での年代的位置づけは、近世以前の可能性が高いということにとどめておきたい。

4 矢穴石の存在から

矢穴石が神通川中流の河岸段丘上に所在する背景について検討する。この石は、周囲の状況から、段丘形成前の河床礫の残存物と判断することは困難であり、他の場所、具体的には神通川河床からここへ運び込まれた可能性が高い。

この河岸段丘沿いを北東方向へ約1.2km離れた富山市栗山地内には横穴式石室をもつ伊豆宮古墳が所在する。この古墳は7世紀前半の変形八角形古墳とされ⁽⁶⁾、低位段丘崖際に築かれるといった立地が矢穴石と共通する。この古墳の天井石は花崗岩玉石で1石のみが残る。周囲に天井石とみられる1mほどの川原石があり、その表面にノミ跡が認められる。

矢穴石が所在する位置から約200m北東の地点には、かつて福居古墳があったとされるが、正確な出土地点は不明である。周辺においては7世紀中葉の伊豆宮古墳が初めて出現することから、福居古墳の存在は疑問視されるという見解もある⁽⁷⁾。

人工的に搬入されたとみられるこの矢穴石は、周囲の状況から搬入の契機を類推すると、後期古墳の横穴式石室天井石等として大きな川原石のまま持ち込まれた可能性が高い。その後古墳の封土が流出等して石室石材が露出する状況が生じ、石材獲得の素材として割り取られることになったと考えられる。この場合、伊豆宮古墳の前後の時期における新たな古墳の存在、あるいは疑問とされる福居古墳である可能性も考慮できよう。

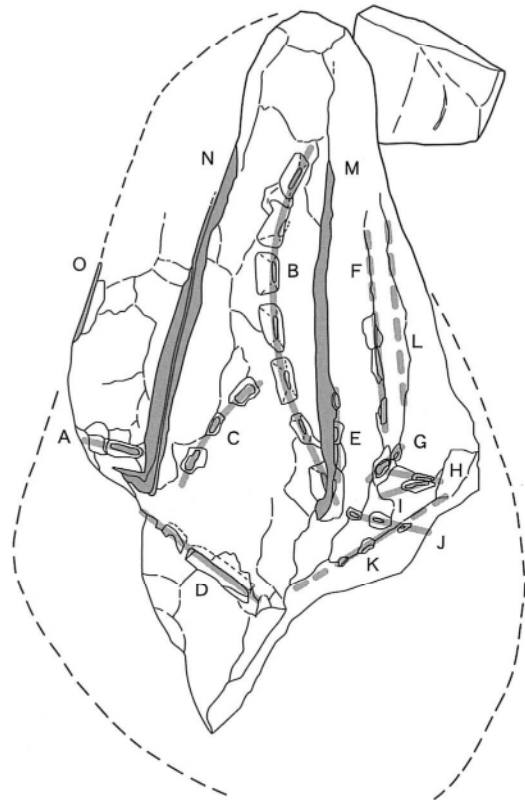
5 おわりに

この矢穴石の発見により、中・近世期のいずれかの段階とみられる新たな矢穴石割技術が確認できたが、その詳細な年代解明は不明なまま残された。今後は、矢穴石周囲の確認調査等による持ち込まれた原因解明と、その年代的位置づけを明らかにする作業が必要である。

本稿の作成にあたり、西井龍儀氏、藤田富士夫氏、富田和気夫氏からご教示を得た。記して感謝の意を表します。

註

- (1) 石動山文化財調査団・氷見市教委 1989『国指定史跡石動山文化財調査報告書—八代仙ダム計画関連—』
- (2) 北野博司 2003「金沢城石垣の変遷1」『金沢城研究』創刊号 金沢城研究調査室ほか
- (3) 西井龍儀氏のご教示による。
- (4) 富山城では平成18年度実施の石垣解体調査で1石のみ確認されている。
- (5) 富田和気夫氏のご教示による。
- (6) 藤田富士夫 1996「伊豆宮古墳の変形八角形墳試考」『富山市考古資料館報』No. 30
- (7) 小黑智久 2003「越中東部地域における初期須恵器」『富山市考古資料館報』No. 40



第3図 矢穴列の構造

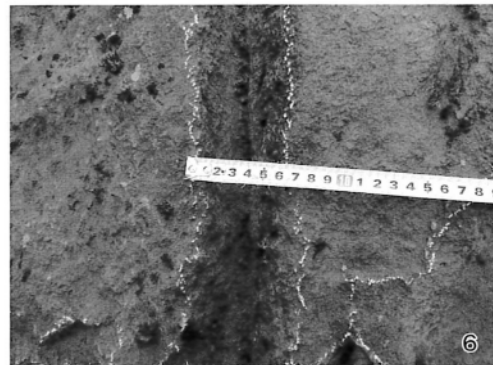
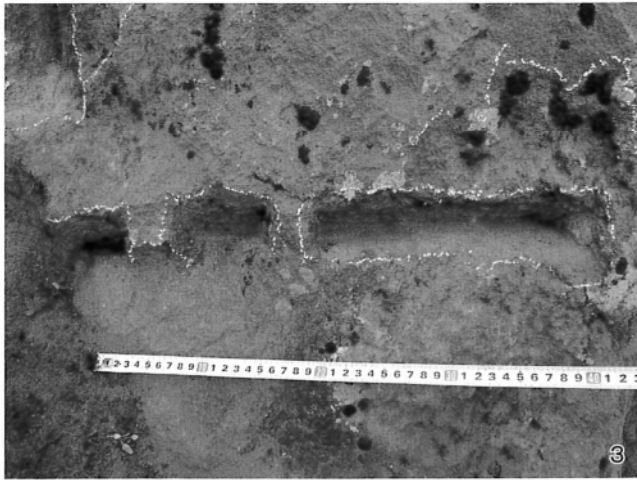


写真1 矢穴石近景

2 矢穴列Bと溝切N

3 連結中の矢穴列D

4 矢穴 (B列中)

5 溝切M・矢穴列J
の周辺

6 溝切N部分

7 矢穴の粘土型

8 矢穴横断面の比較

(左：慶長期富山城石垣、右：下大久保矢穴列)

